

## 東北地方太平洋沿岸における歴史津波の史料と伝承の分析 —1611 年慶長奥州地震津波に関する新出史料を中心に—

Analysis of historical documents and the tradition of the historical tsunami in the Tohoku.  
—Mainly on the new appearance historical documents about  
the 1611 Keicho Oshu earthquake and tsunami—

蝦名 裕一\*

### 1. はじめに

慶長 16 年 10 月 28 日 (グレゴリオ暦 1611 年 12 月 2 日) に発生した慶長奥州地震津波 (従来は慶長三陸地震津波と呼称) に関する歴史資料については, その多くが武者金吉編『日本地震史料』, 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』などに収録されている。これらの史料を用いて, 羽鳥 (1975) や宇佐美 (1978) はこの地震津波の規模を評価した。また都司・上田 (1995) は史料から判明する津波痕跡を調査し, 三陸沿岸の一部では, 1896 年明治三陸地震津波よりも, 慶長奥州地震津波の痕跡高が大きかったことを明らかにしている。

近年, 蝦名 (2013) および蝦名・高橋 (2014) はビスカイノ報告をはじめとする慶長奥州地震津波の史料を歴史学的見地から再検討し, また, 蝦名・今井 (2014) は歴史学的分析から判明した津波痕跡点の現地調査により, 慶長奥州地震津波の津波被害地域が岩手県北部から福島県中部の広範囲にわたることを確認した。さらに今井ほか (2015) では, 従来相田 (1977) の波源モデルによって Mw8.1 とされてきた地震規模について, 近年の新たな研究成果をもとに, 地震規模が Mw8.4 ~ 8.7 となる可能性を示した。

一方で, 2011 年に発生した東日本大震災以降, 慶長奥州地震津波に関する新たな歴史資料が発見されるとともに, 東北地方太平洋

沿岸各地の災害伝承や災害地名に対する関心が高まっている。太宰 (2012) は宮城県内の災害地名を中心に各地の伝承を収集している。また, 遠藤 (2013) は東日本大震災の津波被災地における「カマ」「オナ」「スカ」といった地名がかつての津波災害に由来する地名であることを述べている。しかし災害伝承や災害地名を歴史災害研究に活用する場合, それらの伝承や地名について歴史資料から事実関係を検証するとともに, これらの伝承や地名がどのような過程で成立していったのか, 十分な考証が必要である。

そこで, 本論文では慶長奥州地震津波に関する史料や伝承について, 2011 年以降に見られた史料や『日本地震史料』・『新収日本地震史料』に未掲載の史料や伝承を中心に分析し, これらの事例を歴史災害研究の俎上に載せることにしたい。

### 2. 慶長奥州地震津波に関する史料について

#### (1) 福島県相馬市・海東家文書の新出史料

旧相馬中村藩の海東家は, 江戸時代に相馬中村藩に仕えた齋藤家の子孫にあたり, 二宮尊徳の四大門人である富田高慶や齋藤高行を排出した家である。特に幕末の当主である齋藤完隆は, 相馬藩の地誌『奥相志』や相馬藩士の系譜『衆臣家譜』などの編纂に携わった人物であった。2013 年, 相馬市に寄贈された海東家文書群は, 『奥相志』の草稿や藩内各地の歴史・地理に関する膨大な原稿が存在

\*東北大学災害科学国際研究所

しており、現在相馬市教育委員会が展開している相馬市史編さん事業の中で、新たに慶長奥州地震津波に関する記述を含む史料として「利胤君御年譜」、「小高山同慶寺記録」、「小高山古記録」の3点発見された。

従来、相馬中村藩領において慶長奥州地震津波に関する記述が存在する史料は、『相馬藩世紀』に収録される「利胤朝臣御年譜」のみであった。今回慶長奥州地震津波の記述が発見された3点は、この「利胤朝臣御年譜」との関連が深いと考えられるので、下記にこれら4点の記述を列挙して分析する。

#### ①「利胤朝臣御年譜」(『相馬藩世紀』収録)

一、(慶長16年)十月廿八日、海邊生波ニ而相馬領ノ者七百人溺死

#### ②「利胤君御年譜」

一、同年(慶長16年)十月廿八日、海邊生波ニテ相馬領ノ者七百人流死、奥筋猶多シ

#### ③「小高山同慶寺記録」

一、同年(慶長16年)十月廿八日奥州筋生波上、相馬領海辺ノ者七百人、仙臺領二千八百人溺死

#### ④「小高山古記録」

同(慶長)十六年辛亥、十月廿八日生波上ル、相馬内七百人死、伊達ニテ二千八百人死、家道具流、小高ヨリ中村エ在城移ル、七月従普請、十二月移ル

①は『相馬藩世紀』に収録される「利胤朝臣御年譜」の記述である。今日、原本の閲覧は許可されていないが、校訂者である岩崎敏夫氏の「後記」によれば、『相馬藩世紀』は相馬中村藩初代藩主相馬利胤から13代誠胤までの出来事を藩主別に編年形式で記した書であり、その時代ごとに記されたものであるとされる。慶長奥州地震津波に関する記述は、「御年譜一 利胤君御代」と題された冊子の中に存在する。ここでは「海邊生波」によって相馬藩領で合計700人の死者があったことが記されている。

②の海東家文書「利胤君御年譜」は全体と

して『相馬藩世紀』の「利胤朝臣御年譜」とほぼ同内容を記載であるが「奥筋猶多シ」という記述が加えられている。つまり、相馬藩領より「奥」である相馬藩領以北において死者が多いという意味となる。ここから当時の相馬中村藩領において、慶長奥州地震津波の被害が、仙台藩領や盛岡藩領においてより大きかったという認識が存在していたことが判明する。

ただし、この情報がなぜ②のみに記されているのかという理由については現在の所、不明である。①が編纂された際に削除されたか、あるいは②を書写した際に加筆された可能性が考えられるが、①・②の成立年代を特定した上で、情報がどのように伝達されたかを含めて今後の課題としておきたい。

③・④の史料は、いずれも相馬藩主家の菩提寺である同慶寺(南相馬市小高区)の来歴について記した書物であり、当時所蔵されていた記録を書写したものとみられる。成立年代について、④については巻末が破損しており不明であるが、③は巻末に「享和三亥卯月七日書之、渡辺源兵衛八十五」とあることから、享和3年(1803)に書写された史料であることが判明する。

③「小高山同慶寺記録」では、「奥州筋生波上」とあり、「生波」という記述に「ツナミ」

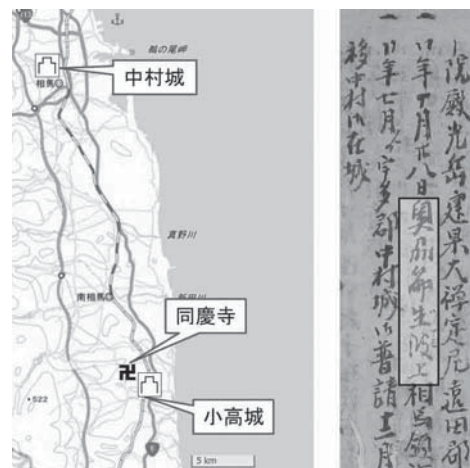


図1: 同慶寺の位置 写真1: 「小高山同慶寺記録」(部分)

と振り仮名がされている。①～④の史料はいずれも「生波」と記しているが、当時の相馬中村藩においてはこの表記で「ツナミ」と呼称していたことがわかる。

また③の史料において、慶長奥州地震津波について「奥州筋」と表現していることに注目したい。つまり江戸時代においては、この慶長16年(1611)に発生した地震津波について「奥州」、現在の東北地方太平洋沿岸域で発生した災害として認識されていたのである。この地震津波が従来の研究で「慶長三陸地震津波」と呼称されていることについて、蝦名(2013)は「三陸」が明治以後に成立した用語であることを指摘している。この史料に「奥州筋」と記されている事実により、歴史学研究の視点からは史料用語を用いて「慶長奥州地震津波」という呼称するのが妥当といえる。④「小高山古記録」の記述は、③の記述とほぼ同内容であるが、津波の被害について「家道具流」という追記がされている。

加えて注意したいのが、③・④において相馬中村藩領700人の後に、仙台藩領で2,800人の死者があったことを記している部分である。実際の仙台藩領の死者については、伊達政宗の家臣・真山正兵衛が著した「真山記」に記される1,783人が正確であると考えられるが、③・④の数値はこれを誤ったものであろう。

ただし、この情報が③・④の史料に記された経緯について注意しておきたい。江戸時代に各藩に流布したと考えられる『駿府政事録』または『駿府記』では、政宗領の死者が5,000人と記されているので、これを引用したものではない。一方で仙台藩では「真山記」に記される数値が、仙台藩が貞享元年(1689)に幕府に提出した「貞享書上」や元禄16年(1703)に成立した仙台藩の正史である「貞山公治家記録」などに踏襲されている。すなわち、③・④の史料に記される仙台藩の死者数は、同慶寺の関係者が何らかの形で仙台藩が調査した慶長奥州地震津波の死者数の情報を入手し、それをもとに記述したものと考えられる。

## (2) 宮古市・常安寺所蔵史料

岩手県宮古市周辺において、慶長奥州地震津波の被害について記した代表的な史料が『南部叢書』に収録される『宮古由来記』である。これによると、慶長奥州地震津波が宮古町・黒田村に襲った際、宮古の曹洞宗寺院・常安寺も津波によって流失した。当時の常安寺住職は小山田で法事執行中に沖の異様な音を聞き、辛うじて津波を逃れて山口へ逃れたという。なお、『宮古由来記』と同内容の史料として寛政10年(1798)頃に成立した「小本家記録」(『宮古市史資料集(近世1)』所収)や天保8年(1837)に成立した「重信公御由来」(『田老村史資料集近世4』)などがある。これらの史料は、いずれも慶長奥州地震津波に関する記述のほか、盛岡藩初代藩主・南部信直が若い頃に閉伊郡小本に潜伏した由緒や、閉伊郡花輪で生まれた4代藩主・南部重信の説話などが記述されており、若干の文言の違いがある他は同一の内容である。同内容の史料はこの他にも多数存在していたようで、『南部叢書』における『宮古由来記』の解題によれば、同書は「小本根元記」や「小本旧事記」といった諸本をもとに比較校訂したと記されている。つまり、『宮古由来記』に記される慶長奥州地震津波の情報は、江戸時代以来、宮古地域で写本を通じて流布していたものと考えられる。

常安寺は、慶長奥州地震津波の後、寛永2年(1625)に現在の宮古市沢田に寺院を再建し、今日まで同地に存在している寺院である。なお、慶長奥州地震津波発生以前の常安寺の位置について、都司・上田(1995)は館合町としているが、実は正確な位置は特定されておらず、現在の宮町一丁目周辺とする説もある(佐々木, 1954)。いずれにせよ、明治期の地籍図には横山八幡宮から館合町にかけてかつて常安寺の土地であった記されていることから(蝦名・今井, 2014)、山口川周辺にかつての常安寺が存在したと考えてよいだろう。

ここでは、現在常安寺に所蔵されている史料のうち、明和2年(1765)に成立した「口上書を以願上候事」および明治30年(1890)

に記された「常安寺調書」についてみていくことにする。

### ①「口上書を以願上候事」

常安寺所蔵の「口上書を以願上候事」は明和 2 年 (1765) 6 月に常安寺 10 代住職義詮和南が、宮古御給人であり当時代官所下役を勤めていた中島万左衛門に宛てた書状である。史料全体としては常安寺開基以来の檀家である花坂氏の先祖黒田蔵之助の供養の実施を願う内容であり、史料の前半部において常安寺の来歴として慶長奥州地震津波の被害および宮古町の変遷について記されている。

常安寺ハ、志賀之宮古横山ヨリ此所本常安寺引移候て数年安住仕候所ニ、慶長十八年丑ノ十月廿八日津浪ニテ寺宝物共ニ海上ニ被取候、当年迄右年号ヨリ百六拾五年ニ相成申候、其時之住寺ハ常安寺二代嶺鷲和尚代ニテ宮古町者共同時ニ海上ニ被取、住居可仕様モ無御座、人民の所々数々ニ罷成、宮古之人民大分死去り申候、依て二代和尚、黒田蔵之助殿江被参候て住居之所御候得ハ、横町長福院屋舗之内ニ小庵ヲ御立住寺差置申候、此所出入四ヶ年住居被申候、其後黒田蔵之助殿より沢田庄打手ヶ沢之麓ヲ見立、東西五拾軒、北より南江五拾軒、余門より外南之方江ハ通り筋斗ニテ客殿七軒ニ横五軒建立被致寄進被成候、然時ハ実ニ花坂氏ハ常安寺開基且那ニテ何義ニ不寄疎ニ不成候、且其頃宮古之人民ハ僅式拾人不過候、藤原町人民ハ山江上り存命申仕候者三十軒余相残候由伝候、其頃ハ宮古町ト申候て横町ニ拾軒余、小沢ニ相続キ式拾軒余有之由申伝候、去ル間病死之者御座候而も小沢其所差置候、横町ハ御制札之後山ニ而相仕斗類候、但元禄七年之頃より宮古人民多ク罷成墓所無御座者本寺江送り候、… (後略)

これによると常安寺 2 代住職嶺鷲和尚の時代、慶長奥州地震津波が発生し、宮古町は壊滅し、多くの人々が溺死した。津波を逃れた嶺鷲和尚は黒田蔵之助の援助により横町長福



図 2：常安寺と宮古市域の地名の位置関係

院で一時暮らした後、沢田に住居を移して常安寺を再建した。

常安寺が再建された頃、慶長奥州地震津波の被害によって、宮古町の住民はわずか 20 人を数えるほどになり、家屋は横町に 10 軒、小沢に向かって 20 軒程度が残っている状況でまた藤原町では津波の際に山に登り助かった人々の家が 30 軒ほど残った程度であったとしている。宮古で徐々に人口が回復したのが元禄 7 年 (1694) ごろであり、この頃から住民の増加に伴い、墓地の不足が懸念されるようになったという。

「口上書を以願上候事」に記される宮古町や藤原町における被害の情報は、『宮古由来記』の系統の史料にはみられない情報である。また、津波発生年について『宮古由来記』の系統の史料はいずれも慶長 19 年 (1614) と記しているのに対し、「口上書を以願上候事」では慶長 18 年 (1613) と記している。ここから、この情報が『宮古由来記』とは別系統の情報源、すなわち当時の常安寺に独自に伝わっていた情報であることが確認できる。

### ②「常安寺調書」

「常安寺調書」は、明治 30 年 (1897) に常安寺 21 世黙之超三が、常安寺の来歴について記した史料である。その中で「備考」として、慶長奥州地震津波について記述されて

いる部分が存在する。

#### 備考

國主南部利直公時代、慶長十九年十月廿八日、當寺第二世嶺鶯和尚法要ノ為メ隣村小山田村野澤金右エ門宅ニ到リ佛事執行中、東方ニ當リ鳴動スル事四五度ニ及ビタルニヨリ、和尚讀經ヲ中止シテ満座ノ衆ハ勿論近隣ノ者ニ對シ、是レ平素ノ震動ニアラズ必ス海潮襲来ノ兆ナラン、依テ愚僧モ是ヨリ歸山シテ什物ノ保護ニ怠ラス、且ツ貴殿等ニ於テモ毎事由断ナク家財ハ勿論、家族老幼ヲ助シテ生命ヲ完全セシメヨト云放ツテ、午後八時頃歸途ニ就キタルニ、最早海潮ノ閉伊川ニ逆流シ来リ人夫ヲ督シ、辛フシテ漸ク渡船シ、直チニ門内ニ入ラントセシニ、既ニ境内ハ塵モ残ラズ流亡シ、恐怖シテ背後ノ山嶺ニ攀テ平地ヲ望觀スレハ、一片ノ砂漠トナリ、當宮古町ハ尚更近隣ノ部落過半家屋ハ流失シ、此所彼處ニ人畜ノ負傷セシモノ及死体ハ所々ニ散乱シアルモ、是ヲ救フニ一人ノカラニテハ如何トモ致兼、夫レヨリ山口村ニ到リ人夫ヲ督シテ救護ノ策ヲ講ゼント山嶺傳ヘン、…(後略)

ここで語られる慶長奥州地震津波の発生時、嶺鶯和尚が小山田で法要中で海からの異様な音を聞いたこと、津波から逃れて山口へ避難したことなど記される内容の骨子は、『宮古由来記』の系統の史料にある慶長奥州地震津波の記述とほぼ同一である。津波被害の情景について詳細に記されている点については、この史料が明治29年(1896)の三陸地震津波の翌年に成立した史料であることを考えれば、筆者である黙之超三が実際に体験した津波の記憶も多分に反映されたものであろう。

この史料で着目したいのが、「口上書を以願上候事」の段階で津波発生年を慶長18年(1613)とされていたのが、「常安寺調書」では慶長19年(1614)となっている点である。つまり、「口上書を以願上候事」の段階で常安寺に伝わっていた伝承が、「常安寺調書」の段階で『宮古由来記』系統の内容に置き換

わっている。『宮古由来記』の解題によれば、校訂の際に使用した書物として、常安寺所蔵の「田子九郎記」(田子九郎は南部信直のこと)も参照した事が記されており、黙之超三もこれを参照して「常安寺調書」を作成したものと考えられる。同一地域の中で歴史津波の情報が共有化される過程で、情報の取捨選択がおこなわれた事例のひとつとしてみておきたい。

### 3. 慶長奥州地震津波に関する伝承の検証

#### (1) 岩手県山田町における津波到達伝承

岩手県山田町における慶長奥州地震津波の痕跡を記す史料としては、山田町関谷の「武藤六右衛門所蔵古文書」が知られている。これによると慶長16年(1611)の津波の際、津波の第1波が房ヶ沢、第2波が寺沢、第3波が山田川橋の上まで到達したという。

また、関谷地区の口碑として、かつての歴史津波が「手長の明神」まで到達したという伝承が残されている。この口碑の存在を最初に指摘した今村明恒(1933)によれば、慶長16年の大津波の伝承として「同所に於ける口碑に拠れば、慶長年間の津浪のとき、浪は手長の明神の處まで打ち上げた為め、浪合の明神とも呼ばれる様になつたと言はれて居る。」としている。

2014年に筆者が山田町文化財保護審議委員の佐々木久夫氏とともに実施した調査では、「武藤六右衛門所蔵古文書」に記される「房ヶ沢」について、関口地域では「房ぼうのさわ沢」は武藤家の分家の屋号であるとともに、かつて存在した「房の沢遺跡古墳群」付近の地名と考えられること、「寺沢」の地名について、現在の山田町山田第9地割の龍昌寺付近は「寺沢」ないし「寺坂」と呼ばれていたことが確認された。あわせて「手長の明神」は山田町山田第16地割の関口川上流部に存在し、今日も地域でかつて津波が到達した伝承が語られていることが確認された。

「手長の明神」については、もりおか歴史



図 3：山田町の地名と「手長の明神」の位置

文化館所蔵の「大槌領山田関係書類」の中に、若干の記述がある。「大槌領山田関係書類」は山田町域に残る古文書や歴史情報を書写した史料であり、表題は不明であるが、大正末期から昭和初期に地元で作成された地誌類の写しと考えられる史料が収録されている。その中に、「手長ノ明神」について次のような記述がある。

#### 五、浪打明神（神話伝説）

関谷部落関谷河岩ニアリ、太古浪ノ打寄セシ所ト伝フ、一説ニハ手長ノ明神トモ言ヒ、口説ニヨリ昔（年代不明、内野ニ今ノ龍鼻アリシ頃トイウ）洪水アリ、人畜ノ被害甚ダシカリシ時出デ、多数ノ人民ヲ手ヲノベテ御助クダサレシモノトカ、依リテ祭りテ手長ノ明神トモ名ヅクトイフ

ここでは、「手長の明神」の正式名を「浪打明神」として記している。「手長ノ明神」は地元の洪水における伝承がもとになっており、「浪打明神」は太古の津波が押し寄せたことに由来しているとしている。ただし、ここでは「浪打明神」の伝承に語られる津波の年代がいつのものか、現段階では特定できず、更なる調査を要する。

#### (2) 南三陸町の津波伝承

現在の南三陸町域には地名にまつわる津波伝承が残されており、2011年の東日本大震災以後をうけてこれらの伝承が改めて着目さ

れている。太宰（2012）によると南三陸町入谷大船沢は、「昔、大津波があつて、大きな船がここまで流されてきた」という伝承があるという。この伝承について、『入谷物語』（入谷郷土史研究会、1980）によれば、南三陸町入谷地区には津波伝承に起因する古人屋敷の名が残されており、入谷水口沢には津波で舟が上ってきた「舟河原屋敷」、津波で砂が押し上げられた「上砂屋敷」、また入谷桜葉沢には津波が押し寄せてきたが津波が入り込まず村人も旅人も命が助かった「残谷屋敷」が存在していると記されている。

また太宰（2013）によれば、南三陸町戸倉水戸辺の経文塚には「昔、津波に襲われたとき、一人の和尚がそこへ座り津波が収まるのを願って経を唱えたところ、奇しくもその手前で静まった」という伝承があるという。

加えて、水戸辺地区に居住する西條實氏によると、「長の森寺（慶長大津波時に寺から逃げず赤い法衣を纏って一心に経文を唱え、膝まで波が来ながらも助かった住職の言い伝えがある）」としている。さらに西條氏が祖父から教えられた伝承として、水戸辺川沿いにいくつもの慶長津波に由来する地名が残っているとされている（西條、2014）。

筆者は2013年に西條氏とともに水戸辺川流域の伝承地および「長の森寺」の場所とされる地点について確認するとともに、水戸辺地区の津波伝承について聞き取りをした。同地には慶長の津波により笹が押し寄せられていた「出笹沢」、女性が亡くなっていた「女の沢」、波の中から鳥が飛び立った「鳥越沢」、牛が多数死んでいた「牛殺し沢」、吉三郎という人が亡くなっていた「吉三郎沢」があり、東日本大震災の津波到達点を経て、舟が寄っていた「舟沢」、家が寄っていた「小屋の沢」、津波最終到達地点の「タタカイ沢」という地名があったという。

ただし、例えば入谷地区の「残谷」や水戸辺川の「タタカイ沢」など標高100メートルを超えている地点も多く、これを慶長奥州地震津波の津波痕跡地点と判断するには一考を要する。ゆえに、南三陸町地域における津波



図4：南三陸町における津波伝承地

伝承について、歴史資料の記述から分析を加えておきたい。

近代以前の史料で災害伝承が確認できるのは、宝暦7年（1757）に入谷村の地名や神社仏閣の由来について阿部泰武が記した『入谷安部物語』（志津川町誌史料集2所収）である。これによると、入谷村の水口、桜葉、林際、大船の地名は、入谷の祖である入谷隼人の4人の子からとられており、大船沢の地名の由来については「当村二人の始る由来の事」という章に次のように記している。

…又大船沢昔津波の阿かり候時、此沢迄阿かりたる故大船沢と言又此舟おこの大船四郎かつなぎとめる共言事…

大船沢という地名については、津波の際に舟が上ってきたこと、または先の伝説にみる入谷隼人の子・大船四郎が津波の際に舟をつなぎとめた事に由来するという。なお、『入谷安部物語』では大船四郎および入谷隼人については、藤原秀衡（?～1187）以前の人物とされている。つまり、江戸時代中期の段階において、「大船沢」にまつわる伝承は、1611年慶長奥州地震津波をはるかに遡った時代の説話として語られていたことになる。

なお、この史料からは「舟河原」「上砂」「残谷」が津波に由来する地名であることは確認できない。

入谷地区の津波伝承を記した史料としては、仙台藩が明和・安永年間（1764-1780）に藩士の系譜を編集した『伊達世家譜』の大槻五郎兵衛条に、入谷地区における慶長奥州地震津波の被害を示す記述がある。大槻氏ははじめ伊東、または伊藤氏を称しており、米沢に居住していたが、後に大槻氏に改姓して仙台藩に仕え、桃生郡大田村（現在の石巻市桃生）に居住していた。次が『伊達世家譜』大槻氏条に記される慶長奥州地震津波に関する記述部分である。

…祐宗子清右衛門祐次、来<sub>二</sub>于仙臺<sub>一</sub>、住<sub>二</sub>本吉郡入谷邑<sub>一</sub>、慶長十六年十月遭<sub>二</sub>海水溢<sub>一</sub>溺死、此時流<sub>二</sub>失武具及系譜<sub>一</sub>、是以自<sub>二</sub>元祖九郎祐清<sub>一</sub>至<sub>二</sub>父主殿祐宗<sub>一</sub>之間、世数事实俱不<sub>二</sub>詳<sub>一</sub>、姑録<sub>二</sub>所<sub>一</sub>傳言<sub>一</sub>、祐次子五郎兵衛清成、慶長末有<sub>二</sub>故改<sub>一</sub>大槻氏<sub>一</sub>、…

これによると、大槻氏の先祖伊東清右衛門祐次が米沢から仙台に来て、入谷村に居住していた。しかし、慶長16年（1611）10月に津波に遭って伊東祐次は溺死し、武具や系図を失った。その後、伊東祐次の子・五郎兵衛清成が慶長年間末に大槻氏に改めたとする。なお、伊東家の系図は津波によって失われたため、姑の言い伝えを採録したものであるとしている。

一方で、延宝7年（1679）に成立した『仙台藩家臣録』では、大槻五郎兵衛の系譜として「祖父五郎兵衛儀、仙道浪人にて御座候。貞山様御代慶長拾九年に被召出、」とあり、この段階では伊東祐次が津波で溺死した事実については確認できない。ただ、『仙台藩家臣録』そのものに慶長奥州地震津波に関する記述が皆無であることを考慮しなければならないが、あるいは、大槻家において伊東家と繋がる系譜が存在しないことについて慶長奥州地震津波を理由とした可能性も考えられるが、少なくとも江戸時代の入谷地域において、

慶長奥州地震津波が入谷地方で家屋流失や溺死者をもたらした大きな災害であるという伝承が存在したことは確かであろう。

## おわりに

最後に本論文で述べたことをまとめておこう。

本論文では、まず旧相馬中村藩領と宮古市域において慶長奥州地震津波に関する新たな史料を確認することができた。旧相馬中村藩領において『相馬藩世紀』以外に新たに3点の史料が発見されたことは、江戸時代の相馬中村藩領において慶長奥州地震津波の情報が共有されていた事実を示すものである。また「小高山同慶寺記録」において、この津波の被災範囲が当時「奥州」と認識されていたことが確認できる。

常安寺所蔵の「口上書を以願上候事」は、従来把握されていた『宮古由来記』とは別の系統の情報が常安寺に伝えられていたこと、また、宮古町や藤原町における慶長奥州地震津波後の様相について、新たな情報が得られた。

山田町および南三陸町の災害伝承については、その起源を歴史資料からどこまで検証できるかを試みた。山田町の「手長の明神」にまつわる津波伝承については年代が特定できず、現段階でこれを慶長奥州地震津波の津波痕跡とするには、今村(1933)に拠るしかない。なお、手長明神という名称は現在の福島県新地町にも存在し、同地の伝承を分析した喜田(1919)によれば貝塚と関係のある神とされる。「手長ノ明神」と「浪打明神」または「浪合明神」の名前がどのように成立していくのか、関谷地域の歴史を踏まえつつ、さらに調査を続けたい。

南三陸町における津波地名の伝承は江戸時代の段階で既に伝説化して年代が特定できない。ただ、近世後期の段階で同地区では慶長奥州地震津波が大きな被害をもたらしたという認識が存在し、それが『伊達世家家譜』における大槻家の記述につながったものと判断

できよう。

江戸時代の初期に発生した慶長奥州地震津波は、その時代的特性ゆえに同時代に記された史料は少なく、その実態を解明するためには史料と同様に伝承の分析が必須である。今回解明しえなかった点については、伝承のみならず地域全体の歴史をふまえて見直すことを今後の課題としておく。

謝辞：本研究の一部は、科学研究補助金（研究代表者：蝦名裕一，若手研究（B）「慶長16年（1611）大地震・大津波の新研究」：課題番号 24720290），東北大学災害科学国際研究所平成24-25年度特定プロジェクト研究（研究代表者：今村文彦，課題番号：拠点研究A-2）の補助を受ました。また、図面の一部には国土地理院による地理空間情報ライブラリー（地理院地図 電子国土 web）を利用しました。ここに記して、謝意を表します。

## 参考文献

- 相田勇，三陸の古い津波のシミュレーション，地震研究所彙報，52，71-101，1977。
- 今井健太郎・前田拓人・飯沼卓史・蝦名裕一・菅原大助・今村文彦・平川新，組み合わせ最適化手法を利用した歴史津波の波源推定法，東北地域災害科学研究，51，139-144，2015。
- 今村明恒，三陸沿岸に於ける過去の津浪に就て，地震研究所彙報別冊，1，1-16，1934。
- 入谷郷土史研究会，入谷物語，35-36，1980。
- 岩崎俊夫・佐藤高俊校訂，岡田清一校注，相馬藩世紀第一，続群書類従刊完成会，pp280，1999。
- 宇佐美龍夫，江戸時代における三陸地方の地震活動，地震研究所彙報，53，379-406，1978。
- 蝦名裕一，慶長奥州地震津波の歴史学的分析，宮城考古学，15，27-43，2013。
- 蝦名裕一，今井健太郎，史料や伝承に基づく1611年慶長奥州地震の津波痕跡調査，津波工学研究報告，31，139-148，2014。



- 蝦名裕一・高橋裕史、『ビスカイノ報告』における1611年慶長奥州地震津波の記述について、歴史地震, 29, 195-207, 2014.
- 遠藤宏之, 地名は災害を警告する, 技術評論社, 2013.
- 太田考太郎編, 南部叢書(一), 東洋書院, 317-335, 1970.
- 喜田貞吉, 手長と足長, 民俗と歴史, 1巻4号, 1919.
- 西條實, 戸倉路のつたえ—語り継ぐ津波の道標—, RQ聞き書きプロジェクト, 2014.
- 佐々木勝三, 陸中海岸の史蹟, 44-45, 黒田書店, 1959.
- 佐々久監修, 仙台藩家臣録, 2, 348, 歴史図書社, 1978.
- 志津川町誌編さん室編, 歴史の標, 264-265, 志津川町, 1991.
- 志津川町誌編さん室編, 志津川町誌史料集, 2, 795-819, 1991.
- 仙台叢書刊行会, 伊達世臣家譜復刻版, 2, 54-55, 宝文堂, 1975.
- 太宰幸子, 地名は知っていた<上>—気仙沼～塩竈・津波被災地を歩く, 河北新報出版センター, 2012.
- 都司嘉宣・上田和枝, 慶長16年(1611), 延宝5年(1677), 宝暦12年(1763), 寛政5年(1795), および安政3年(1858)の各三陸地震津波の検証, 歴史地震, 11, 75-106, 1995.
- 東京大学地震研究所編, 1993, 新収日本地震史料続補遺, 44p.
- 羽鳥徳太郎, 三陸沖歴史津波の規模と推定波源域, 地震研究所彙報, 50, 21-38, 1975.
- 宮古市教育委員会編, 1984, 宮古市史資料集(近世一), 宮古市, 74p.
- 武者金吉編, 復刻日本地震史料, 1, 明石出版, 714p, 2012.